

弔 辞

日本学士院会員高垣寅次郎博士の成城学園葬に際し、私はまず、博士の卓越した学問的業績と九十五年のご生涯の大半を学界のために尽くされたそのご努力とに対し深い尊敬と感謝の念を捧げます。

博士は、本院における最長老の会員のお一人として、また、その誠実なお人柄によって日頃より会員一同から敬慕されておられました。ここ一兩年、学士院の例会にご出席なさることがありませんでしたのでご案内申しております。博士の温容に再び接することが出来なくなったことは誠に遺憾のきわみであります。

高垣博士のお仕事の詳細に触れることは控えますが、金融経済学特に貨幣論や金融論、金融制度史の研究では、埋もれた文献を掘り起こし、顧みられなかった資料に新しい光をあて、綿密な分析と解釈を基調とした論著を世に問い、学界に少なからぬ刺激を与えました。また、その折々博士が博搜した貨幣金融論を中心とする文献は和洋を問わず夥しい数にのぼりますが、現在では成城大学に「高垣文庫」として収蔵され、今後、広く利用されることが期待されます。このことは「古書文献蒐集もそれ自から学問研究の一部分」であるという博士のお考えが結実したと言いききであって、永く記憶されるべき事柄と申せましょう。

日本学士院は、昭和二十四年十月、博士を会員にお迎えしてその功績を称えました。当時博士は、一橋大学の講壇に立っておられました。以来三十五年余、深遠な学殖と豊富な体験を活かされ、本院の入賞および会員選

弔 辭

考に関する重要な審議に参画され、そのうち数年間は第三分科の委員長として議事進行の中心的役割を果たされる一方、屢々専門領域で適切な助言を与えてくださいました。

また、学士院第一部会員の間では、毎月交代で自己の研究を報告紹介する時間をもっていますが、博士も計五回その研究紹介を担当されました。「イギリスの地金論争文献について」は前後二回、その他、「明治初期の金融制度における二、三の疑問」、「『パンフレティア』(一八二三—一八二八年)について」と題するお話をされましたが、いずれもその折々に関心を寄せられていた問題をその核心を捉え、克明、仔細に紹介されたものでした。そして醇々とした口調で語られる論述に深い感銘を受けました。

そのほか一回は、門下のかたの研究の紹介で「明治維新後の金融制度改革の研究の一節——金札について——」と題するものでした。これは後日、本院紀要に論文として掲載されました。

昭和五十五年三月の例会では、博士の満九十歳のご誕辰を祝し、院内でささやかな慶祝の集いを催しました。その折、博士はいつもの明快な口調で挨拶をされ、いささかの哀えもみせませんでした。終始笑顔で同僚会員からの祝福を受けておられました。

学士院では、毎年春秋二回会員懇親会を開いていますが、その冒頭、乾杯の音頭を当日出席の最高齢の会員が執る慣わしとなっています。高垣博士は、都合五、六回その役を受け持たれました。そのときいつも話されたことは、杯に注がれたお酒が博士の郷里広島銘酒「酔心」であることを自慢され私どもを笑わせましたが、博士ご自身も至極ご満悦の面持ちでありました。その折のお顔が今も彷彿と浮んでまいります。

いま、かけがえのない会員を失い寂寥の感ひとしお深いものがあります。しかし、博士の聲咳に接した門下の

方々をはじめ、博士を識る多くの人達によってその偉業は語り伝えられることでありましょう。私はそのことを信じて疑いません。

ここに、日本学士院は博士生前の面影を追想しつつ深甚の弔意を表します。

昭和六十年九月二十八日

日本學士院長 有 澤 廣 巳

弔 辞